



目次

- P.1 国際学部の“強み”はここにある！
- P.2 【1年次】国際フィールドワークⅠの実施報告
「世界に飛び出して現場を見つめ、自分や日本社会を見つめ直す」
- P.3 【2年次】World Youth Meeting (WYM)開催報告
- P.4 【2年次～3年次】アクティブラーニング期間を活かした活動
就職活動ワークショップ／多彩な多世代・多文化交流／長期海外留学
- P.5 【ゼミ活動紹介】SDGsをキーワードに
学内外で多彩な多世代・多文化交流を展開
- P.6 長期海外留学を実施した経験談
- P.6-7 4年生による就職内定報告会「就職活動：先輩たちの経験談」
- P.8 【4年次】卒業研究／卒業論文：4年間の学びの集大成
- P.8 2024年度卒業生代表（成績優秀学生）からのメッセージ

国際学部の“強み”はここにある！

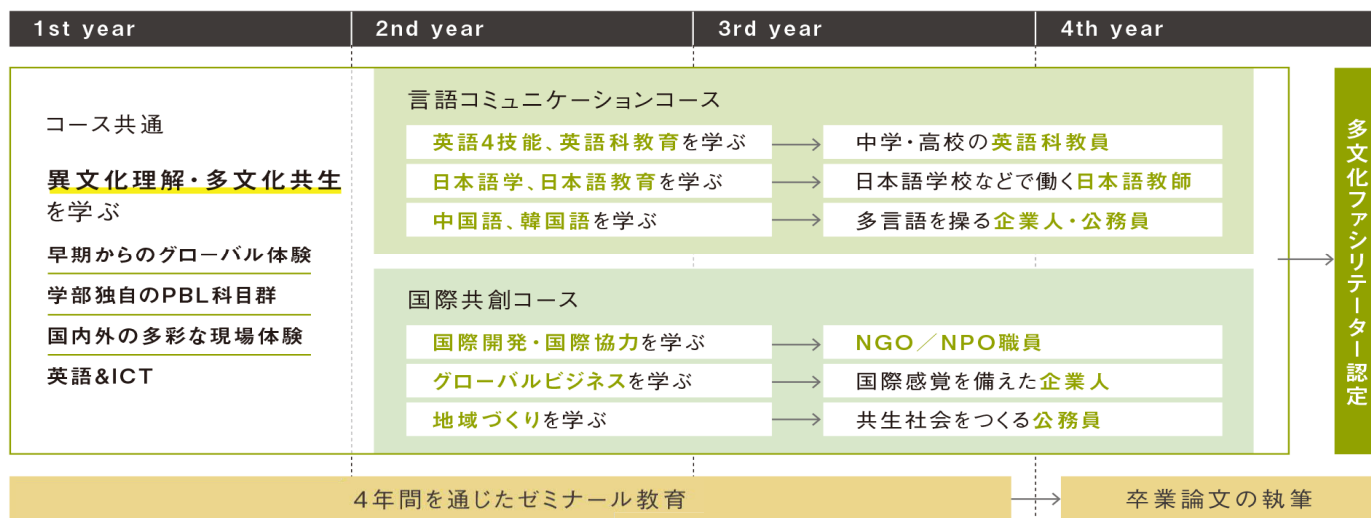
2024年度の名称変更から1年が経ちました。「国際学部だより22号」では、この1年間の在学生の活躍を通じて、本学部の2つの強みを改めて確認します。

①グローバルキャンパスで世界を体感：留学生との共修を通じて、多文化共生社会をたくましく生き抜く力を身につけます。

②国内外でのグローバル体験：地域や海外で多文化を体験し、自ら世界を切り拓く力を養います。

本学部では、1年次に「異文化理解・多文化共生」の基礎を学び、2年次から「言語コミュニケーションコース」と「国際共創コース」の2つに分かれて学習を進めます。

4年間の流れ



◎本号では、2024年度の活動を通じて、国際学部4年間の学びの流れを紹介します。特に4年間を通じて実社会の課題に取り組みながら学ぶプロジェクト型学習（PBL）科目に注目してください！



世界のどこにでも

国内外を問わず、調査・活動する現場を自分で決められます。実施する期間や回数も自由です。



個人でもチームでも

関心が近い仲間とプロジェクトチームを組んで役割分担しながら調査・研究することもできます。



どんなテーマでも

子どもへの学習支援、多文化共生のまちづくり、地域経済の活性化など、研究テーマは自由です。

【1年次】国際フィールドワークⅠの実施報告

『世界に飛び出して現場を見つめ、自分や日本社会を見つめ直す』

本学部では、1年次の2月に約2週間、学生全員がアジア各国を訪れ、現地学生のサポートを受けながら、多様な現場を訪問し調査研究を行います。（外国人留学生は日本での実施も可能です。）ここでは、2025年2月にカンボジアとマレーシアの研修に参加した2名の学生からの報告を紹介します。

近藤 佳稀（一色高等学校出身）

カンボジア研修を一言で表すなら、「かけがえのない思い出ができた」という言葉に尽きるでしょう。

初めて目にする景色に、まるで異世界に来たように感じることもあれば、メコン川中州の集落では、日本での慌ただしい日常を忘れ、ゆったりとした時間の流れに身を任せることができました。十九年間、日本を出たことのなかった私にとっ



て、戸惑うことや不便に感じることもありましたが、「住めば都」という言葉があるように、少しでも慣れ

ば、それらはまったく気にならなくなりました。むしろ、すべてが新鮮で、とても楽しい経験でした。

メコン川で遊んだり、市場での買い物では値切り交渉に挑戦したりと、毎日が充実していました。こんなに楽しい生活で、退屈することなどできるのでしょうか。そして、ガイドさんやバスドライバーさん、ホームステイ先の家族との時間はとても温かく、別れの際には名残惜しく感じるほど素晴らしいものでした。この出会いも、経験も、新たな発見も、私は決して忘れません。



木場遙希（四日市中央工業高等学校出身）

私は2月16日から2月26日まで、マレーシアのペナン島でフィールドワーク研修に参加しました。



現地では、マレーシア科学大学で授業を受けるとともに、施設の見学や文化体験を行いました。中でも特に印象に残ったのは、「Holi」

という文化体験です。Holiでは、「ハッピーホーリー！」と言いながらカラーパウダーを投げ合い、私は白い服を着て参加しました。全身がカラフルに染まり、初めての体験だったこともあり、強く印象に残りました。

私がフィールドワークに参加した目的は、内向的な自分を変え、もっと積極的になりたいと考えたからです。現地の人々はとても明るく、積極的に話しかけてくれました。その姿を見

て、「自分もこんなふうになりたい」と強く感じました。10日間という短い期間でしたが、その中で少しずつ自分が変わったことを実感しました。

この経験を通して、コミュニケーションの大切さや、自分で考える力、そして努力の重要性を学びました。言語が異なる中で、どのようにすれば自分の思いを伝えられるかを考え、積極的にコミュニケーションを取ることの重要性を実感しました。この研修に参加して、本当に良かったと思います。



【2年次】World Youth Meeting (WYM) 開催報告

『世界とつながる 2 日間! 国境を越えた友情と学びの祭典』

担当教員 佐藤慎一

WYM は毎年 8 月に行う英語のプレゼンテーションを中心とした国際交流イベントです。毎年、アジア各国の大学生、高校生が参加します。

2024 年 8 月 6 日・7 日の 2 日間、日本福祉大学東海キャンパスと立命館大学びわこくさつキャンパスで「第 26 回 World Youth Meeting (WYM)」が開催されました。今回のテーマは "Striving for World Peace in Our Daily Lives" でした。日本と海外から 38 チームの若者たちが集まり、熱い交流を繰り広げました!

多彩な参加者と充実したプログラム

本学の東海キャンパスにはフィリピン、カンボジア、韓国、中国、台湾、シリアなどからの参加者が集まりました。国内からは本学のほか、中京大学、関西大学、名古屋商業高校など多くの高校生も参加し、2 日間でのべ 500 名以上が集まりました。

1 日目は、海外校と日本の学校のコラボでの英語プレゼンテーションがメイン! 開会式、基調講演の後、各チームが協力して作り上げたプレゼンを発表しました。



(パネルセッションの様子)

2 日目は、国内外の参加者の交流に重点を置いたプログラム。各国文化紹介ワークショップ、パネルセッション、優秀プレゼン講評などを通じて絆を深めました。カンボジアの算数授業体験や各国のお菓子を味わいながらの交流タイムなど、魅力的な企画が実施され、どの教室も活気に溢れていました。



(カンボジアの算数授業体験)

参加した大学生・高校生からの声

参加者の声をいくつか紹介しましょう。「様々な国の人とコミュニケーションを取る機会があり、WYM は素晴らしい経験になりました!」、「高校生の英語レベルが自分が思っていたより高くて刺激になりました。どのチームも堂々と発表していて見習いたいです。」、「すごく大変だったけど、やりがいや達成感、楽しさの方が何倍も大きかったです。カタコトでも頑張って伝えようとする経験ができて成長できました。」

WYM の魅力とは?

このイベントは単なる英語のプレゼンコンテストではありません。異なる文化や考え方に触れ、視野を広げ、国際的な友情を育む貴重な機会です。2025 年の WYM は 8 月 4 日、5 日に開催されます。あなたも世界中の若者たちと交流してみませんか?ぜひ一緒に世界とつながる体験をしましょう!



(参加国のスナックを楽しみながら)

【2年次～3年次】アクティブラーニング期間を活かした活動

★アクティブラーニング活動を活かした就職活動のワークショップ

担当教員 カースティ祖父江

1. 背景

本学部では、学生が「アクティブラーニング期間（2年の後期後半から3年の前期前半までの約7か月間）」を通じて、フィールドワークやインターンシップ、ボランティア活動などを経験し、主体的に学ぶ機会を提供しています。これらの経験を3年生になってからの就職活動に有意義に活かせるよう、AL期間とキャリア形成を事前に関連づけて考えるワークショップを実施しました。

今回は、本学の卒業生が勤務するMan To Man株式会社の協力を得て、2年生および3年生を対象に開催しました。なお、本ワークショップはキャリア開発課の予算事業として実施しました。

2. 実施内容

実施日時：2024年10月2日（水）2限（2年ゼミの合同企画）、4限（3年ゼミ生の合同企画）

2年生向けワークショップ：AL期間の目的や活動計画の重要性について説明し、事前準備や振り返りを通じてどのように自身の成長につなげるかを考える機会としました。ワークでは、自分の興味・関心に沿った学び方や、今後のキャリアに役立つ経験の積み方について具体的に検討しました。

3年生向けワークショップ：AL期間の経験を自己分析や就職活動に活かす方法について学び、自己理解を深めるためのワークを実施しました。学生は、自分が経験したことを振り返りながら、どのような強みや学び

を得たのかを整理し、それを就職活動にどう活かすかを考えました。また、キャリア形成において重要な視点についても共有しました。

3. 学生の反応

ワークショップを通じて、AL期間の経験が将来のキャリアにどのように役立つかを具体的に考える機会となりました。参加者からは、次のような感想が寄せられました。

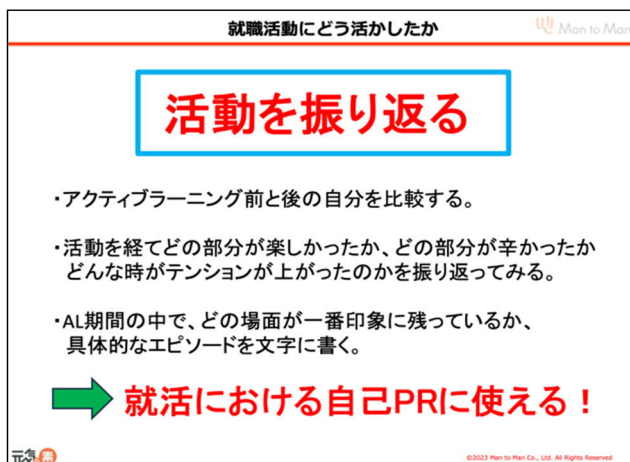
・「自己分析の重要性が特に印象に残りました。自分の強みを理解することで、企業選びや面接がより効果的になると実感しました。」

・「業界研究やネットワーキングの重要性を学び、実践的なスキルを磨く機会となりました。」

・「ポテンシャル採用という言葉が印象に残りました。新卒として働くうえで、専門的なスキルが不足している部分を補うために、学生ならではのポテンシャルを高めることが重要だと感じました。」

一方で、より実践的な内容や具体的な事例を交えた説明を求める意見もあり、今後のプログラムの改善点として検討する必要があります。

ワークショップを通じて、学生がAL期間をより意義深いものとし、将来のキャリア形成につなげるためのヒントを得る機会となりました。今後も、学びとキャリアを結びつける取り組みを継続していきたいと考えています。



★SDGs をキーワードに、学内外で多彩な多世代・多文化交流をゼミで展開

担当教員 千頭 聡

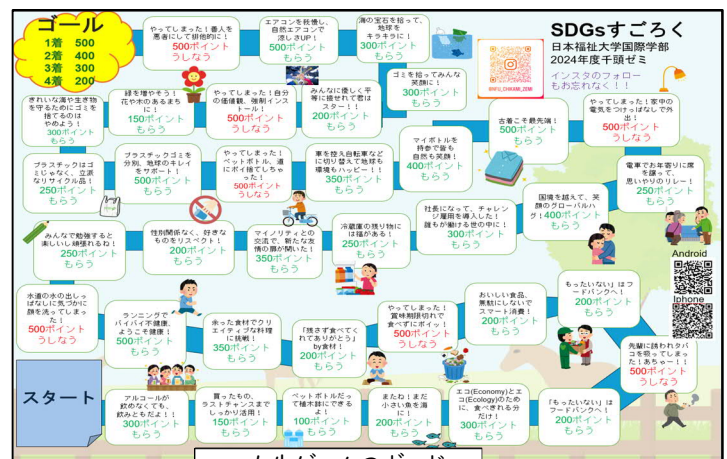
東海市大学連携まちづくり推進事業の補助金や、岩倉市との委託契約などを活かしつつ、広く市民が SDGs を理解し、自分事として行動していくことができるように、活動に取り組んでいます。



取り札の裏面(例)

①SDGs かるた ver.3 の制作と配布

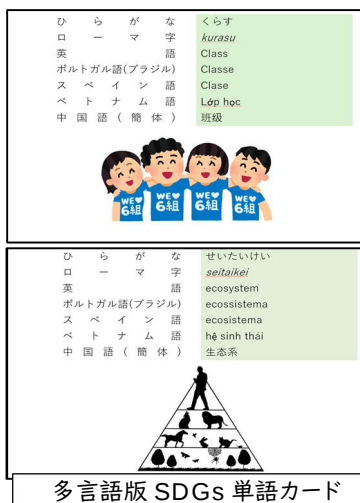
バージョンアップさせた SDGs かるたを制作し、学内だけではなく、東海市内のすべての市民館や市役所で広く配布しています。日本語が得意でない方や児童生徒も想定して、フリガナ付きです



人生ゲームのボード

②SDGs 人生ゲームの制作と配布

人生ゲームを楽しみながら SDGs を理解できるように開発。同じく広く配布しています。



多言語版 SDGs 単語カード



多世代の外国籍市民とゲーム大会

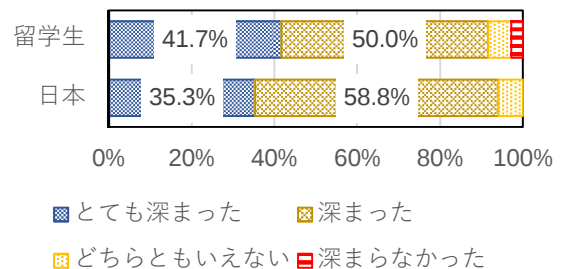
③多言語版 SDGs カードゲーム

日本語がまだほとんどできない外国籍市民を想定して、SDGs のゴールとつながる単語カードを制作し、初期日本語教室で、床いっぱいになど楽しくワークショップを開催しました。



④国際学部 1 年生を対象としたワークショップ

基礎演習の時間に、3 年ゼミ生がファシリテーターとなって、SDGs ワークショップを開催し、参加した 1 年生の 90%以上から、SDGs に対する理解が深まったと回答いただきました。中学校文化祭でのブース出展やサステナブルファッションショーも継続して開催しています。



★アクティブラーニング期間を含めて長期海外留学を実施した経験談

中谷 怜央菜さん(名古屋国際高等学校出身)

私は大学3年生のときに、カナダとオーストラリアへ留学しました。以前にも留学経験がありましたが、「今の自分だからこそ新しく感じられるものがある」と思い、留学を決意しました。

何度海外に行っても、やはり海外での生活では不安や寂しさを感じますし、言語の壁にも悩まされます。留学生活が始まって早々、行きの飛行機の乗り換えでパスポートを落としてしまい、さらにカバンも飛行機の中に置いてきてしまいました。「このまま帰ってしまおうかな」と思ったこともありましたが、さすが、もう大学生になった今、誰かに頼ってばかりではいけないと自分に言い聞かせながら過ごしました。

今回の留学では、中高生の頃には気づけなかった多くのことを学びました。例えば、人種差別の現実や、卒業論文のテーマにも扱った大麻が合法化された街の変化などです。昔は、目の前のことで精一杯で、海外の生活がただただキラキラして見えていましたが、長期滞在を通じて、その裏側まで感じ取ることができました。それでも、最後は「まだ帰りたくない」という気持ちでいっぱいでした。そして、帰国してから何よりも「やっぱり日本は最高だな」と心から思いました。

今後留学を考えている方にお伝えしたいのは、「すべてをポジティブに捉える必要はない」ということです。「楽しい」「素敵」といった表面的な部分だけでなく、「どうしてこうなのだろう?」「違いは何だろう?」と疑問

や違和感を持つことも大切です。それが自分の学びにつながり、今後の人生に必ずプラスになります。



(カナダのバンクーバーで、世界各地から来た学校の友達と)

学生生活の4年間は長いようで短いものです。留学に限らず、ぜひ挑戦してみてください。不安や緊張は当然のことですが、どれだけ小さなことでも、それはきっとより豊かな人生を築くための大きな一歩になると思います。留学に興味がない方も、一度視野に入れてみるのもいいかもしれません。新しい「やりたいこと」が見つかるかもしれません。その一つひとつの経験が、自分を成長させ、視野を広げてくれます。この留学を通じて、「経験は人生の財産だ」と実感することができました。

4年生による就職内定報告会「就職活動：先輩たちの経験談」

3年生の後半から本格的に就職活動が始まると言われていますが、近年では入学後の早い段階からインターンシップを通じて内定を得る学生も増えています。本学部では、就職活動を控えた3年生を主な対象とし、就職意識を高めることを目的に、毎年秋に就職内定を決めた4年生による経験談を開催しています。この経験談は、3年生の就職意識を高めるだけでなく、学年を超えた交流の場としても重要なイベントです。2024年秋の報告会では、内定を獲得した4年生6名が自身の就職活動を振り返り、成功のポイントや後輩へのアドバイスを熱く語りました。そのうち4名は、後輩へのメッセージも寄せてくれました。



◎足立有衣子 就職先:ANA 中部空港株式会社(愛知啓成高等学校出身)

私は、2年生の9月から4年生の3月まで、学内の長期インターンシップ(セントレア保安検査)に参加させていただきました。保安検査は義務であるため、お客様に手間をかけさせてしまうことは避けられません。当初は「大勢のお客様に向かって声を出すのが恥ずかしい」「お客様を余計に待たせてしまわないか」と不安を感じていました。しかし、自分がどのように声掛けをすれば伝わりやすいかを考え、実践すること、わからないことは必ず質問すること、そして自分の身体的・精神的健康が業務に影響

を与えることを学び、やるべきことを丁寧に行えるようになりました。

就職先のANA 中部空港では、グランドハンドリングとして航空機の牽引などに携わる予定です。インターンシップでお世話になった保安検査場とは異なる業務となりますが、空港内のどの業務においても、やるべきことや守るべきことを遵守することが求められます。インターンシップを通して培ったこれらのスキルを、就職先でも活かしていきたいと思います。

◎新美友紀乃 就職先:トヨタモビリティパーツ株式会社(阿久比高等学校出身)

私は、3年生の夏に合同説明会に参加し、興味のある会社のインターンシップに行きました。私の経験から、就職活動をするうえで大切にしたい方がよい点が2つあります。

1 つ目は、早めに行動することです。早めにインターンシップに参加することで、早期選考にエントリーできる会社もあります。実際に、先にひとつ内定をいただくことができた結果、次に受けたいと思っていた会社にも落ちていてエントリーすることができました。

2 つ目は、就職活動を始める前に、他の人にはない強みを持つことです。私は、ボランティア活動に力を入れていたこと、学部留学生や実習先での留学生との関わりを通じて、日本語教育と多文化共生について学んできたことを強みとしました。その結果、面接でも興味を持ってもらうことができ、他の人と被らない話をすることができました。前もってしっかり準備をし、自分の力を全力で発揮できるようにしておくと思いいます。

◎Giri Sandesh ギリサンデス 就職先:株式会社ドリームスカイ名古屋・空港サ-ビス部(ネパール国籍 名古屋福德日本語学院出身)

私はコミュニケーションがとても好きで、4カ国語を話すことができます。これは私の異文化理解と柔軟性を高め、国際的な環境での活躍を可能にしています。私は日本の航空サービスに興味を持っていて、そのサービスの品質向上に貢献したいと考えていました。日本の航空業界は、正確さと丁寧さで知られています。私は、自分の国際的な背景とコミュニケーションスキルを活かし、さらなる成長と発展に貢献したいと考え、空港での就職を決意しました。

また、日本の航空サービスは「おもてなしの文化」に深く根ざしています。お客様への細やかな気配りや心遣いは、日本のサービス業全般に見られ、航空業界においても重要視されています。私は、自身のコミュニケーション能力を活かし、お客様との信頼関係を築くことで、より充実したサービスを提供したいと考えています。日本語の力を高め、日本の航空サービスに貢献することを目指しています。

◎柳田祐弥 就職先:愛知県教育委員会(豊川工科高等学校出身)

私が教員を目指すにあたっては、教職独自科目を履修することに加えて、教員採用試験の対策も行いました。私は、以下の点に気をつけて対策や準備を進めました。

まず、過去問を解くことです。過去問を解くことで、出題傾向を把握しました。次に、複数の自治体で受験することです。私は、愛知県のほかに浜松市と神奈川県を受験しました。浜松市と神奈川県では不合格でしたが、愛知県では無事に合格することができました。そして、面接の練習です。一次試験の結果が発表されてから二次試験の

実施日まで、二週間もありませんでした。そのため、事前に面接対策講座に参加することをおすすめします。面接は練習すればするほど上達するため、積極的に取り組みましょう。これらに加えて、私は学外でTOEICなどの試験も受けました。これらはアピールポイントとして就職に有利になるため、興味のあるものから受験してみるとよいでしょう。

最後になりますが、試験前日までに準備を完璧にすることも忘れないでください。

【4 年次】卒業研究／卒業論文：4 年間の学びの集大成

授業での学びや国内外でのアクティブラーニングを通じて得た気づきや関心、課題をもとに、学生自身が研究テーマを設定します。各専門分野の教員の指導のもと、研究計画の立案、成果の分析や考察を行い、4 年間の集大成として卒業論文を完成させます。ここでは、2024 年度の最優秀論文賞を受賞した学生からのメッセージを紹介します。

2024 年度最優秀卒業論文表彰者 Tangnami Magar Mohan タンナミ マガル モハン(ネパール国籍 名古屋経営会計専門学校出身)

私は『ネパール農村地域における海外労働移住の影響 ―レスンガ市第 12 区の実例研究―』をテーマに卒業論文を執筆しました。1・2 年次には、日本の人口減少や外国人増加、多文化共生の課題を学び、特に在日ネパール人の子どもたちが直面する教育格差に関心を持ち、学習支援ボランティアに参加しました。3 年次には『在日ネパール人高校生の教育状況』を調査し、ハノイ大学で発表しました。

その一方で、発展途上国では出稼ぎや留学による人材流出が課題であることに着目し、カンボジアとネパールの農村地域でフィールドワークを実施しました。4 年次には、ネパール・レスンガ市第 12 区で 76 世帯、地元校 2 校の生徒 125 人、海外で働く若者 21 人を対象に調査を行い、出稼ぎが経済や教育に与える肯定的影響とともに、労働環境や賃金への不満も明らかにしました。

本研究を通じて、国際労働移動の多面的な影響を学び、持続可能な社会について考える機会となりました。ご協力いただいた皆様に感謝し、今後も学びを社会に活かしていきたいと考えています。



【4 年次】2024 年度卒業生代表(成績優秀学生)からのメッセージ



Tangnami Magar Mohan タンナミ マガル モハン(ネパール国籍 名古屋経営会計専門学校出身)
ネパール出身の私は国際的に活躍することを目指し、本学部で多文化共生や国際協力を学びました。WYM や研修など多様な経験を通じて実践力を養い、社会の課題と向き合う姿勢や責任感を育むことができました。

新美友紀乃(阿久比高等学校出身)

国際学部で日本語教育を学び、留学生や外国人児童への支援を通して多文化共生の大切さを実感しました。少人数で温かな環境の中、貴重な経験ができた 4 年間で、今後もこの学びを活かしていきたいです。



編集後記

今号の学部だよりでは、国際学部の 4 年間の学びの流れを振り返りました。1 年次の国際 FW から始まり、2 年次の WYM、アクティブラーニング期間の挑戦、3 年次のゼミ活動や留学経験、そして 4 年次の就職活動や卒業論文と、それぞれの成長の軌跡を紹介しています。今後も充実した学びを積み重ね、世界に羽ばたく学生が増えることを願っています。最後に、学部だよりの原稿作成にご協力いただいた学生と教職員みなさんに、心より感謝を申し上げます。(担当:張 淑梅)

◎2025 年度 東海キャンパスでのオープンキャンパス日程

5月18日(日)、5月31日(土)、8月2日(土)、8月3日(日)、8月31日(日)、9月28日(日)、3月22日(日)

発行人：日本福祉大学 国際学部

〒477-0031 東海市大田町下浜田1071番地

TEL. 0562-39-3811 FAX. 0562-39-3281

編集人：国際学部 学部長 佐藤 慎一

問合先：東海事務室 国際学部担当 (kokusai@ml.n-fukushi.ac.jp)

Instagram



@NFU_KOKUSAI

フェイスブック



学部教員紹介

